

楽しきかなチンドン人生

「大学を出て、サラリーマンになるだけが人生やない」——と今春、立命館大を卒業してチンドン屋さんになった若者が「オモロイやっちゃ」とあちこちで大モテ。お中元セールが始まって以来、一日も休めぬ毎日で「張りあいがあります」と、きょうもピエロ姿で得意のトランペットを吹き鳴らしている。



チンドン宣伝に生きがいを求めトランペットを吹く林さん(下も)

この若者は大阪市西成区ベットを吹き始めたのが、天下茶屋北一の一六、「青空」で、たまたま京都市内下の総合宣伝社」に住み込んで、宿近くの商店街から、大売

ドロン屋保存会」を設立、初代会長となった。そのうち、本格的な修業をとおけた化粧と衣装でピエロにふんし、トランペットを吹いたり、フランクードを持って練り歩いたりするのを初め、ノーパン喫茶の

ど」と申し入れ、一発でOKとなった。「先輩は結局、この道しかない」と保存会の後輩たちからへんな激励の言葉で送り出された林さんは卒業後の今春から同社の二階に住み込み、朝の日課は事務所のそうじから。仕事はおどけた化粧と衣装でピエロにふんし、トランペットを吹いたり、フランクードを持って練り歩いたりするのを初め、ノーパン喫

「サラリーマンは窮屈や」

大阪



ピエロ、大もて
立命卒の24歳

いる林幸治郎さん(三三)。林さんは福岡市の出身で、進学校の修猷館高を卒業、二年間、理工科系大学に通ったあと、京都の立命館大経営学部へ。入学と同時に軽音楽部へ入り、トラン

り出しのための宣伝演奏を頼まれた。子供のころの記憶をたどって、チンドン屋の軽快なメロディーを奏でるうち、そのリズムにすっかり魅せられ、軽音楽部をやめて学内に同好会「チン

社説明会にも出席していたが、神妙に話を聞いているうち「毎日こんな調子やったら窮屈な人間関係にとて耐えられない」と決心、青空総合宣伝社に「ボク、おたくに就職したいんやけ

呼び込みまでなんでもござれ。同社周辺の西成区山玉地区は芸人の多い下町のふん開気を持つ土地柄。青空総合宣伝社は社員七十人で、チンドン宣伝を中心に大売

り出しの飾り付けやアドバリン、風船、チラシをはじめ客寄せ用の福引き、モチつき、堀内アナウンスなどを一手に引き受け、四、五人ずつチームを組んで西日本各地に出かけており、関西のこの業界界では大手。しかし、ほとんどが年配者というところもあって、林さんはたちまち人気者。トランペットの腕も確かで、雇い主からご指名を受け、関西はもろろん、西日本全域まで出かけるほどになった。

給料の方は、日給八千円と、大学時代の同期生の初任給と比べてもますます。「なにより、自分の好きなことをやってメンが食えるんやから」という林さんに福岡市内で金物店を経営する両親も「好きな道やけん」と今では後押し。同宣伝社の佐伯陽三社長(左)は「これからはチンドン宣伝もアイデアの時代。若い元気な後継者ができて、こんなうれいことはない。林君はなんでも助すかしがらずにこなすので、りっぱに成長しませ」と期待している。